

< ジュゼッペ・ドメニコ・スカルラッティ (1685-1757) >



誰もが予想しなかった驚きと遊び心あふれる仕掛けで楽しませてくれる鍵盤の魔術師、ジュゼッペ・ドメニコ・スカルラッティ (1685-1757) についてご紹介します。

スカルラッティは 1685 年、ナポリで生まれました。父親は有名な作曲家のアレッサンドロ・スカルラッティで、10 人兄弟の 6 人目として生まれました。音楽一家の中で生まれ育ち、15 歳になった年にはナポリの教会の作曲家兼オルガニストとして就任しています。1705 年には父の命に従って活動の拠点をヴェネツィアに移し、更に 4 年後の 1709 年にはローマに移り住んで、ポーランド王妃マリー・カジミールの音楽監督という職を得ました。また現バチカン市国にあるカトリック教会である「サン・ピエトロ大聖堂」のジュリア礼拝堂でも働き、5 年後に音楽監督であったトンマーゾ・バイが亡くなると、スカルラッティは音楽監督の座を引き継ぎました。

スカルラッティは生涯を通じて職に困ることがなく、次々に作曲家や音楽監督としての仕事を得ることが出来ました。スカルラッティがジュリア礼拝堂で音楽監督として働いている際にポルトガル大使のフォンテス侯爵と知り合ったことがきっかけとなり、5 年後の 1719 年にポルトガル王ジョアン 5 世はスカルラッティを王室礼拝堂の音楽監督として任命しました。この年の 11 月にスカルラッティはリスボンに到着しジョアン 5 世王の兄弟に音楽を教えるようになりました。

スカルラッティは生涯を通じて職に困ることがなく、次々に作曲家や音楽監督としての仕事を得ることが出来ました。スカルラッティがジュリア礼拝堂で音楽監督として働いている際にポルトガル大使のフォンテス侯爵と知り合ったことがきっかけとなり、5 年後の 1719 年にポルトガル王ジョアン 5 世はスカルラッティを王室礼拝堂の音楽監督として任命しました。この年の 11 月にスカルラッティはリスボンに到着しジョアン 5 世王の兄弟に音楽を教えるようになりました。

その後、スカルラッティは教えていた王の兄弟であるマリア・マグダレーナ・バルバラ王女がスペイン王家に嫁いだためマドリードへ移り住みます。1738 年にはジョアン 5 世はスカルラッティをサンティアゴ騎士団というイタリアでの庇護の下設立された騎士団に叙しました。そして同年には初めてのソナタ集を出版し、ジョアン 5 世に贈りました。このソナタ集の最後に入っていたのが有名な「猫のフーガ」でした。この作品集を通じてスカルラッティの名声はヨーロッパ中に広がっていきました。1757 年 71 歳、スカルラッティはマドリードで亡くなりました。生涯で約 600 曲弱作曲されたと言われてはいますが、実は彼の 555 曲の自筆譜は失われており、現在残っている楽譜のほとんどは写譜です。



その後、スカルラッティは教えていた王の兄弟であるマリア・マグダレーナ・バルバラ王女がスペイン王家に嫁いだためマドリードへ移り住みます。1738 年にはジョアン 5 世はスカルラッティをサンティアゴ騎士団というイタリアでの庇護の下設立された騎士団に叙しました。そして同年には初めてのソナタ集を出版し、ジョアン 5 世に贈りました。このソナタ集の最後に入っていたのが有名な「猫のフーガ」でした。この作品集を通じてスカルラッティの名声はヨーロッパ中に広がっていきました。1757 年 71 歳、スカルラッティはマドリードで亡くなりました。生涯で約 600 曲弱作曲されたと言われてはいますが、実は彼の 555 曲の自筆譜は失われており、現在残っている楽譜のほとんどは写譜です。

<愛猫の横切る足跡がフーガのモチーフに！？>



「猫のフーガ」として有名なこの作品は1738年に出版された最初のソナタ集で、ジョアン5世に献呈された「*Essercizi per gravicembalo*」（チェンバロ練習曲集、全30曲）の最終曲として収められています。生前に唯一、作曲家自身が出版した曲集で、序文には曲集が演奏技法の修練を目的としていることが書かれているため、

彼が音楽教師として仕えていたマリア・バルバラの日々の練習曲として書かれたのではないかと思います。作品は単一楽章から成り、「ト短調のフーガ」で書かれ、曲集唯一の4声のフーガで書かれています。「猫のフーガ」という呼び名は作曲者自身が名付けたものではなく、フーガを構成するモチーフにまつわる面白いエピソードが人々を魅了し、19世紀初め頃から使われ出しました。ちなみに名付け親とされているのは、ソナチネアルバムで有名なムツィオ・クレメンティです。エピソードによると、スカラッチェの愛猫プルチネッラは彼の奏でるチェンバロに興味を持ち、鍵盤の上を横切る習慣があったとのこと、スカラッチェはこれらの「即興演奏」の中から1つのフレーズを書き出し、フーガの主要モチーフとして使用したと伝えられています。作品としては主題、対主題が和音進行をしているところ、またゼクエンツが多用され、主題の増2度、減4度進行をはじめとした不協和な響きが特徴となっているなど、古い「対位法」に対する新たな要素が取り入れられた作品になっています。

この通称は19世紀のコンサート演目にも使用されており、ムツィオ・クレメンティや、練習曲集で有名なカール・チェルニー、ヴィルトゥオーゾピアニストとして活躍していた、フランツ・リストや、イグナーツ・モシェレスなども「猫のフーガ」のタイトルでコンサートの演目に加えており、19世紀を通じて大変人気のある作品でした。

